

令和7年度「とうきょうすくわくプログラム実践報告」 2才児クラス

【テーマの設定理由】

働く車や電車などの乗り物が好きな2歳児。特に電車は、個々によって興味の幅が広い。

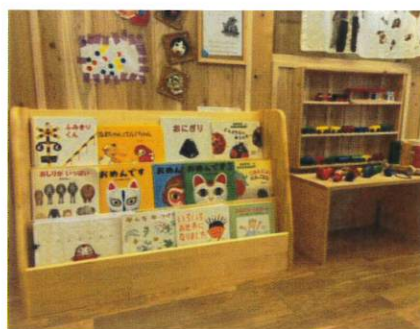
男児hは、電車と同じ目線になって走らせる。男児rは踏切が好きで「カンカン」と手から踏切の動きをして遊びの輪に加わる。女児kは電車にミニドールを載せてごっこのように楽しむ。同じ電車でも楽しみ方はそれぞれである。自分の手で動かし、その子自身が遊びの主人公となり、それぞれの「好き」が繋がり、子どもたちの世界が広がっていけば良いなと思い『想像』をテーマに環境を設定する。

【活動スケジュール】

子ども達の「好き」や「興味」から始まるもの。特定の時期や活動を取り上げるのではなく、様子に合わせて継続して活動を実施している。

【活動のために準備した環境】

- 思い切りレールを繋げられるよう、積み木スペースを広げる。
- レールがあるそばに車庫を作る
(置きたくなる、並べたくなるデザイン)
- 電車は、それぞれの見立てができるようシンプルなものにする。
- より興味が広がるような絵本。



2025年6月

レールと電車の量が増えたことで、その子その子の発想によって、レールの形が無限に広がっていく。今は、自分のやりたいように、とことん繋げていく事が楽しい様子。レールの終わりが終点になることは、誰も言わないが、子ども達の共通の理解となっている。

陸橋や、駅など、一人ひとりの興味によって、レールの作り方が変わっていく。

他児のレールとぶつかると、お互いに繋げることで、友だち同士のやりとりも生まれている。

2025年6月

遊ぶ子によって、レールの形が変わる。この日は長細くなる。男児a、男児bが両端から電車を走らせていると、その様子を見ていた女児cが、レールを跨いでトンネルになる。電車を走らせ始める。会話は無いが、お互いに目を合わせて嬉しそう。その雰囲気にも男児dもトンネルになる。



振り返り

電車遊びと言っても、それぞれの興味や好きなことは違っている。レールを長く繋げて行こうとする子もいれば、電車を走らせたい子、走っている電車を同じ目線で眺めていたい子…。やりたいことがそれぞれだからこそ、子ども達の様子を見ながら、担任間で環境を再構成していくことが必要だと感じている。同じ素材なのに、毎日作られるものが違う。友達同士が繋がりがあい、関わりあいながら、遊びが創られて(想像)いく。また、モノだけではなく、自分自身も環境の一部となって、遊びの世界を楽しんでいる様子に、関わり方の豊かさを感じる。

2025年7月

だんだんとレールを作ることに、複雑さを好む姿が出てきている。保育者が鉄橋を潜るレールを作ったことに興味を持ち、子ども達も同じように作ることが増えてきた。一方通行にならずに、お互いの電車がぶつかり合い、「どいて」「やだ」の言い合いになることも多いが、この日は、お互いの様子(スピードやどこを走っているか?)を見ながら、電車を走らせる2人の姿が見られた。



2025年9月

見立てやごっこ遊びを楽しむ姿も増えてきた。分かりやすいアイテムを加えることで、よりごっこの世界も広がるかもしれないと考え、レールのそばに動物や木の積み木を置いておく。すると、それに気づいた男児 e が、「どうぶつえんにいくんだ」とレールの横に動物や草を置き始める。「キリンははっぱたべるの」と、キリンのそばには大きな木を何本も置く。ある程度、じぶんのイメージでレイアウトし、納得すると、電車を走らせ始める。そのうち、じぶんでも寝転がり、電車と同じ目線になって、動物たちの様子を見ながら、走らせていた。



2025年9月

「ここでまってる。ならんでるの」と、積み木の階段を持ってきて、ミニドールをきれいに並べる。本児なりに、自身の経験を積み木を利用して再現する姿が見られた。そこから、電車に人が乗って走らせる遊びも増えてきている。



振り返り(保育者の気づき)

『電車が走る』だけではない。

レールの形に注目して、そこが駅となり、人が集い、新たな世界が始まる。

電車を動かす子、人を動かす子、そこで言葉のやり取りが生まれ、友達との関係も広がってきている。

「のせて」「いいよ」「えきにつきました」「ありがとう」などのやり取りは、お互いに嬉しくてたまらないという表情。おもちゃを通じて、子ども達の遊びがより豊かでおもしろくなっている。保育者は、子ども達の気づきや発想を大切にしながら向き合っている。

子ども達は、いつも見守られているという安心感のもとに、日々創ることを存分に楽しんでいる。

1人でじっくり遊ぶこともあれば、気づけばクラスのほぼ全員が、電車に関わっていることもある。なんとなく楽しそう！な雰囲気伝わってくるのだと思う。

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東村山市本町 2-22-3
園名	幼児教室すずめ

1. 活動のテーマ

<テーマ>

自分の世界を表現する

<テーマの設定理由>

発達の差が大きい三歳児。

言葉を介して友だちと関わることを楽しんでいる子もいれば、個人で自分の遊びを深めている最中の子もいる。故に別々の遊びで分かれて過ごしていることが多かった。その中で積み木を設定。積み木を介して自分の世界を表現していく子どもたち。発達に差がある子どもたちが言葉だけではなく、作ったものを近くで見て、作って、というやりとりをしていた。

また、積み木と共に表現を出来るマグペッタンや、表現しやすい物として、絵を描くためのクレヨン、紙も素材として用意する。

2. 活動スケジュール

日々室内遊びで子どもたちが過ごす中、「遊びたい」という気持ちになった時に使えるように、積み木のコーナー、お絵描きコーナーを作り、その場に用意しておく。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

パーティション（積み木を他のあそびをしている子に壊されたり、邪魔されたりということが起きない為に設置）

つみき（長方形の形、人型、動物型）マグペッタン、ホワイトボード、紙、クレヨン、テーブル



2026年9月

マグペタンでは顔や花、数字などを様々な形をどのように使うか考えて作っていく。太陽の陽射しを扇型で表現したり、男児aがぶどうを作る。それを見た男児bが色違いのぶどうを作ったり、同じ形を使って違うものを作り、見せあっていた。



2026年2月

男児aが鬼退治の練習をしたいと新聞豆を作る。部屋の中で投げ始めるが、「鬼に投げたい」と言い、マグペタンで鬼の顔を作る。その後、他の子どもたちが豆まきをするきっかけになった。



振り返り

積み木と違い崩れにくい為、作りやすい。○や□など様々な型を、保育者が思いつかないような使い方で表現する。作ったものが見てすぐわかりやすいので、子ども達も始めやすいように思う。

友だちが作ったものを見て同じものを作りやすい為、作りたいものを表現する事が苦手な子も一緒に作る事が出来るように感じた。ホワイトボードを使用するが、人数が多くなってしまうと作りたい物が作れず、けんかになってしまうことがあった。

今ではお互いにスペースを譲り合って使うこともできるようになり、それぞれ楽しむ姿が見られるようになってきた。

4. 探究活動の実践

<活動の内容・活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>



2026年6月

牛乳パックなどで電車をつくり、積み木で線路を作り始める。男児 a が枕木を付けると、男児 b、男児 C も並べ始める。線路の周りに木やお客を置き、電車を走らせ、枕木が崩れると友だちが直してくれた。

2026年9月

動物型の積み木で遊んでいた子どもたち。

ペンギンをワニに乗せて水辺を泳がせたり、きりんの人に乘せてサファリパークのようにしたりして楽しんでいた。二歳児男児が来て一緒に遊び始める。人形で“ミック”を再現。木の後ろに隠し「シーモアさんどこかな?」と言い、男児 a が一緒に探す。



2026年12月

新しい動物が仲間入りしたことで、積み木と組み合わせてじっくり遊んでいる子が増えた。

男児 a、男児 b、女児 c、女児 d は積み木を積み上げ動物園を作る。家やお風呂にしようと言うお互いのアイデアに「いいねえ!」と賛同し盛り上がっていた。

振り返り

自分で作ることに意欲的。登園するとすぐに積み木のコーナーでお家や動物園など作っている。そこへ徐々に友だちが集り、一緒に作りだす。お客さんや動物の飼育員などを置き、ごっこ遊びが始まる。担任が介入しなくても子ども達だけで物語が次々進み、楽しむ姿が増えてきた。また、作ったものが壊されたり、片付けたりしなくていいようにコーナーを広くしたことで、納得のいくところまで続けられるようになった。



とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東村山市本町 2 - 2 2 - 3
園名	幼児教室すずめ

1. 活動のテーマ

<テーマ>

光・色

<テーマの設定理由>

- ・本園では、好きな遊びを好きなところで好きな人（もちろん一人でゆったりじっくりもあり！）とたっぷり楽しむ。その中で子どもの気づきや発見から始まる保育を大切にしている。2歳児～5歳児クラス（各1クラス）
- ・以前からプリズモを《はめる》遊びはみられていた。が、模様を組み立て方が複雑になったきたり、子どもたちも無限の色の組み合わせに新たな面白さを感じ始めていた。そこへプリズモを光に当てるという出来事があり、配色だけでなく『明るい』や『暗い』を感じる体験に繋がると思い設定。

2. 活動スケジュール

子ども達の様子に合わせて継続。また、ふと思いついた時に遊びに戻れるようプリズモは常に置いておく。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

プリズモ（大・小・型）…少しずつ増やしていく
製作したプリズモを飾る場所の設定…窓際（光の調整）
ライト
暗く設定できるコーナーと部屋

4. 探究活動の実践

〈内容、活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

2025年6月

- ・5歳児と4歳児のプリズモ遊びの中で、光に当ててみるときれいに見えるという発見があり、保育者は“この気づきをこれで終わらせたらもったいない”とプラネタリウムのように遊んでみる（教材室にて）
- ・保育室ではなかなか見ることのできない光景に「すごいよ!」「きれい」と驚く
- ・「大きくなったり小さくなったりするね」と、プリズモを動かすことで天井に映る色や大きさが変わることにも気づく（ライトとの距離を様々に変化させる）
- ・「先生の顔も赤くなってる」と天井以外の色の様子に目を向ける

○この活動が印象に残り、5歳児の子どもたちが他クラスをプラネタリウムに招待したいという流れへ

- ・他クラスや事務・給食室の職員にも作ったチケットを配りプラネタリウム
- ・4歳児、3歳児…天井の色の変化をよく見ている。終わった後も「きれいだったね」と振り返る子も。一方で、暗い部屋に慣れていないので入ることにためらう子もいる
→保育者と一緒だと安心して座って見ていられる
- ・2歳児…初めは理解が追いつかない様子だったが、光の動き方や映し出し方に注目する姿が見られる

○3歳児クラスにプリズモを設定

- ・5歳児の真似をして遊び始める
→型にはめていろいろな色の組み合わせを楽しむ
→できあがったプリズモを下から覗いてみる
→隣の部屋の2歳児もプリズモに興味を持って触ってみる

○3歳児Y君「（段ボールの）家がないと見れない」

Mちゃん「暗くないから見れない」

→2歳児保育室の押し入れを借りてみる

- ・綺麗に映りみんなで喜ぶ。満足そうな表情

○その後もプリズモへの興味は継続。特に4歳児では『回った時の色』を考えながらプリズモこまを作る子どもが増えた



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ・子どもたちの遊びやわくわくから始まったプリズモの遊びが、クラスの枠を超えて広がったことがとても嬉しい。一緒に楽しんでくれる友だちや・大人が身近にいることで子どもたちの育ちに繋がっていくのだなと改めて感じた
- ・光の綺麗さを知る一方で、暗がりというものがあるからこそ“明るい”がわかるようになった
- ・今回はプリズモという“透き通る”素材があり子どもの遊びが豊かになったと実感。子どもの発見を引き出していくには、様々な環境やおもちゃの設定を引き続き考えていく
- ・子どもの“やりたい”を保障していくことの大切さ

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

幼児教室すすめ

テーマ 自然に触れる

テーマ設定の理由

5才児クラス19名。進級当初から生き物に興味を持ち、散歩先などで虫や魚を捕まえることを楽しんでいた。一方で生き物に興味はあるが触れる事を怖がったり躊躇したりして観察をメインに楽しんでいる子もいた。

そこで…9月、山梨県北杜市にある『ハケ岳自然ふれあいセンター』『白州山の家』に行くことにした。

活動スケジュール・活動内容

9月24日…ハケ岳自然ふれあいセンターでのガイドウォーク

レンジャーさんと森の中を散策

9月25日…白州山の家で過ごす 好きなことを好きなだけ楽しむ

生き物(カエル、バッタ、コオロギ、カマキリなど)を捕る

草花や枝を使った工作

活動中の姿

【9月24日】

森に入ってさっそくレンジャーさんが拾って見せてくれたのは、少し腐敗した木。崩れて柔らかくなっている部分を触って「ふわふわしてる」「柔らかいね」。中に虫がいたような形跡をレンジャーさんに教えてもらい、中を覗き込んで不思議そうに観察していた。

原っぱでは自由に散策。捕まえたバッタやカマキリ、チョウチョなどを透明のプラスチックコップに入れてじっくり観察。直接触ることに抵抗がある子もコップの中に入っていると怖がることなく興味を持っていたように感じた。虫だけではなく真っ白なキノコも発見。レンジャーさんから触っても大丈夫な品種だと教えてもらい、恐る恐る触れてみる子もいた。



【9月25日】

白州山の家で1日をすごす。自分の好きなことを時間を気にせず好きなだけ楽しむ1日。敷地内には広い原っぱや雑木林がありそこにはたくさんの生き物がいるため、子どもたちが自由に使えるように虫網や虫かごを用意しておく。朝食の前から夕食になるまでカエルやバッタ、カマキリ、コオロギ、チョウチョなどを追いかけて捕まえるのに夢中になっていた子どもたちだった。「ぶにぶにしてる」「触角が長い」「(同じ生き物でも)こっちと色がちがう」「これは小さいから赤ちゃんかな？」手で触れた時の感触や大きさ、素早く動く生き物をどうしたら捕まえられるか、どのくらいの手で持ったらつぶれないのかなど、気付いたことをその都度友だちと共有していた。



はじめはそんな友だちの姿をそばで見ているだけだった生き物が苦手な子たち。楽しそうに生き物と触れ合っている友だちの姿に刺激を受けたのか、用意していた虫かごの中の生き物を観察がはじまる。特にカエルが跳びはねる動きに興味が出たようだった。そしてはじめて自ら触れてみようとする子も出てきた。はじめは指先でチョンと恐る恐る触れていたが、実際に触れてみると「かわいい!」「今鳴き声聞こえた!」「ここがぶくってふくらんだ!」「わ!跳んだ!」と目を輝かせていた。そこからはずっとカエルを追いかけて楽しんでいた。



また枝と毛糸を使ってガーランド作りも楽しんだ。ガーランド用の枝を拾いに雑木林の方へ行くと、落ちていているどんぐりやまつぼっくりに気付いて拾い、近くに咲いていた花と組み合わせてイヤリングにしている子もいた。拾った枝の長さや形など自分好みの枝を探し、枝の皮の色や質感を比べる子もいた。



振り返り・保育者の気付き

2泊3日の短い日数だったが、この数日で生き物や自然への興味がさらに広がったように感じた。森の中ではいろいろな知識のあるレンジャーさんと一緒に散策することで、普段は見過ごしてしまうような自然の中での新たな気付きがあったり、知らなかったことを教えてもらったりしてとてもいい機会になった。以前は生き物を捕まえることを楽しんでいただけの子が多かったが、捕まえた生き物の動きや体のつくりなどについてじっくりと観察する姿が増えたように思う。トンボやチョウチョの羽の模様やトカゲの表情など、気付いたことを友だちと共有する姿もさらに増え、これまではあまり興味がなかった子もそこに参加するようになっている。



枝を使ったガーランドは、友だちの誕生日プレゼントやクリスマスツリーのオーナメントとして再び作って楽しむ姿もあった。白州では作らなかった子も友だちに教えてもらいながら楽しんで作っていた。白州での体験が帰って来てからの保育につながるようなこともあった。



普段散歩に出るとどうしても帰りの時間に制限が出てきてしまうが、豊かな自然やゆったりとした時間の流れの中で『好きなことを好きなだけ』できる環境が、子どもたちの興味が広がっていく大きな要因のひとつになったと感じる。

現在でも散歩に出るときは自分で虫かごや虫網を準備している子どもたちの姿がある。冬はなかなか生き物に出会う機会がなかったが「冬眠してるのかも」と言いながら生き物が出てくる季節を心待ちにしていた。気温があがりあたたかくなってくると「春になったから虫が出てくるはず」とさっそく散歩先で探している。先日カマキリの卵を見つけた。虫かごに入れ、いつ卵がかえるのか、そのためにはかごの中をどんな環境にしたらいいのかなどを友だちと相談しながら試行錯誤し、経過を観察して楽しんでいる子どもたちだ。

4歳児もも組「多摩動物公園遠足&園内お泊り保育に向けて」

昨年9月にさくら組が『白州山の家』にお泊りに行ってきた事を知ると、全員ではありませんが「もも組さんでもお泊りをしたい!」「蜂谷先生だけズルい!」という声が出てきていました。多摩動物公園は秋の遠足で行った後に、クラスで写真や園内マップを使って、見た場所に印を付けながら振り返りをしています。「楽しかったね!」「また皆で行きたいね」「〇〇は見てないよ!」「ライオンバスにもう一回乗りたかった」など楽しかった思い出や次回への希望が湧いている様でした。



例年もも組では、2月頃に園内お泊りを実施しています。担任としては、クラスのみならず『園内お泊り』を体験してみたいと思っていましたが、今年の子も達の様子を見て、この時期に無理をして実施する必要があるのかという思いもありました。どうしようかと考えている時に、子ども達の成長を肌で感じる場面が幾つもあり「この雰囲気なら良い体験に繋がるのではないか」と思い実施する事に決めました。

子ども達にはどういう誘い方をすれば良いかと思っていた時に、ひまわり会のお泊りがありました。担任が卒園した5年生以上の子ども達と園舎にお泊り会をした事を話してみると、そこでも「いいな～」と言ったり『もも組さん皆でお泊りしてみたいな』という雰囲気がとても感じられました。

きっかけは、散歩先に向かう時に1人の子どもと担任がまたお泊りの話題になり、「もも組さんみんなでお泊りしたい!!」とはっきりと言ってきた事です。「じゃあ、〇〇ちゃんがみんなを誘ってみる?」と聞いてみると「うん!分かった!」と。早速その日にみんなの前に立ち「ももさんでお泊りをしよう!」と誘ってくれました。最初はいきなりすぎたのか「・・・」という感じだったので、担任が少し言葉を付け足すと「やったー!!」「みんなでお泊りだって!楽しみだな!」等やっと自分達の順番だ!という感じで大喜びです。

お泊り保育が決まった後は『もう一度行きたい!』と言っていた多摩動物公園の遠足を、その日に行くのも面白いかと思っていました。そんな時偶然にも「蜂谷先生! もも組さんで動物園に行きたい!!」と言われました。「じゃあ、この間の〇〇ちゃんの時みたいにみんなのこと誘ってみる?」と聞くと、どうすればいいかイメージも湧いているので「うん! みんなの前で言う!」と誘ってくれました。

その後は日程が近づいて来たところで、お泊りの夕飯を決めたり、荷物は何か必要か等も子ども達と一緒に話をしてきました。その中で「夜の探険をしたい!」「暗いから懐中電灯が必要だよ!」という意見も出て、とても楽しみにしていました。半面、子ども達からも自然と「楽しみだけど、寝る時はちょっと怖いな〜」「おかあさんがいないのは・・・」等気持ちが揺れている場面も見られるようになってきました。どうしても難しい場合は、夜中でも保護者には来てもらう約束はしていたので、どうなるかなと思いながら当日を迎えました。

動物園遠足は「ライオンバスに早く乗りたい!」「昆虫園も行きたい!」「前に来た時は、オオカミの方を観てないからそっちに行こうね!」など終始楽しんでいました。繰り返しの体験から、以前とは違う発見をしたり、動物の細かい動きや色などにも気付いているようでした。オオカミを見た時は、読み聞かせの絵本の『いやいやえん』の話を思い出し、「やっぱり、パトカーに乗せられて動物園に連れて行かれたのはこのオオカミだ!」と現実とお話の世界を繋げて楽しんでいる姿も見られました(笑)。



園に戻ってからのお泊り保育も「早く夜の探検をしたいよ！まだなの？」と何回聞かれたか分からない程です。夕食を終え、やっと自分達で作った『おやつ券』を持って隠れている担任をうみ、そら組の部屋に探しに行きました。ドキドキしながらも真っ暗な部屋の中、懐中電灯を使って探し、見つけた時の顔は緊張や達成感、友達との共感など色々な感情が交じり合った感じの笑顔でした。



寝る前、本当に園舎に泊まるんだと不安を感じ、泣いてしまったり「は～、やっぱりママが良いな～」と呟いている場面もありましたが、あっという間に夢の世界へ。夜中に目が覚めていた子どももいましたが、直ぐに寝入り朝に。起きると「もう朝だよ！お腹空いた！」「もうお迎えが来るんだよね？！あ～、楽しかった」と何処か自信に繋がった顔をしていました。

この1年を振り返って、こんな事、あんな事やってみたい！と子ども達からの発信がどんどん増えてきています。様々な体験を通して、子ども、保育者との関係が更に深まってきている事、さくら組になる事にもとても期待をしているので、来年度の成長が今から楽しみです。

担任 蜂谷